

修身はなし



東京自由堂

010083-000-9

特64-823

修身はなし(家庭教育)

西村 富次郎 / 著

M23

AAE-1361



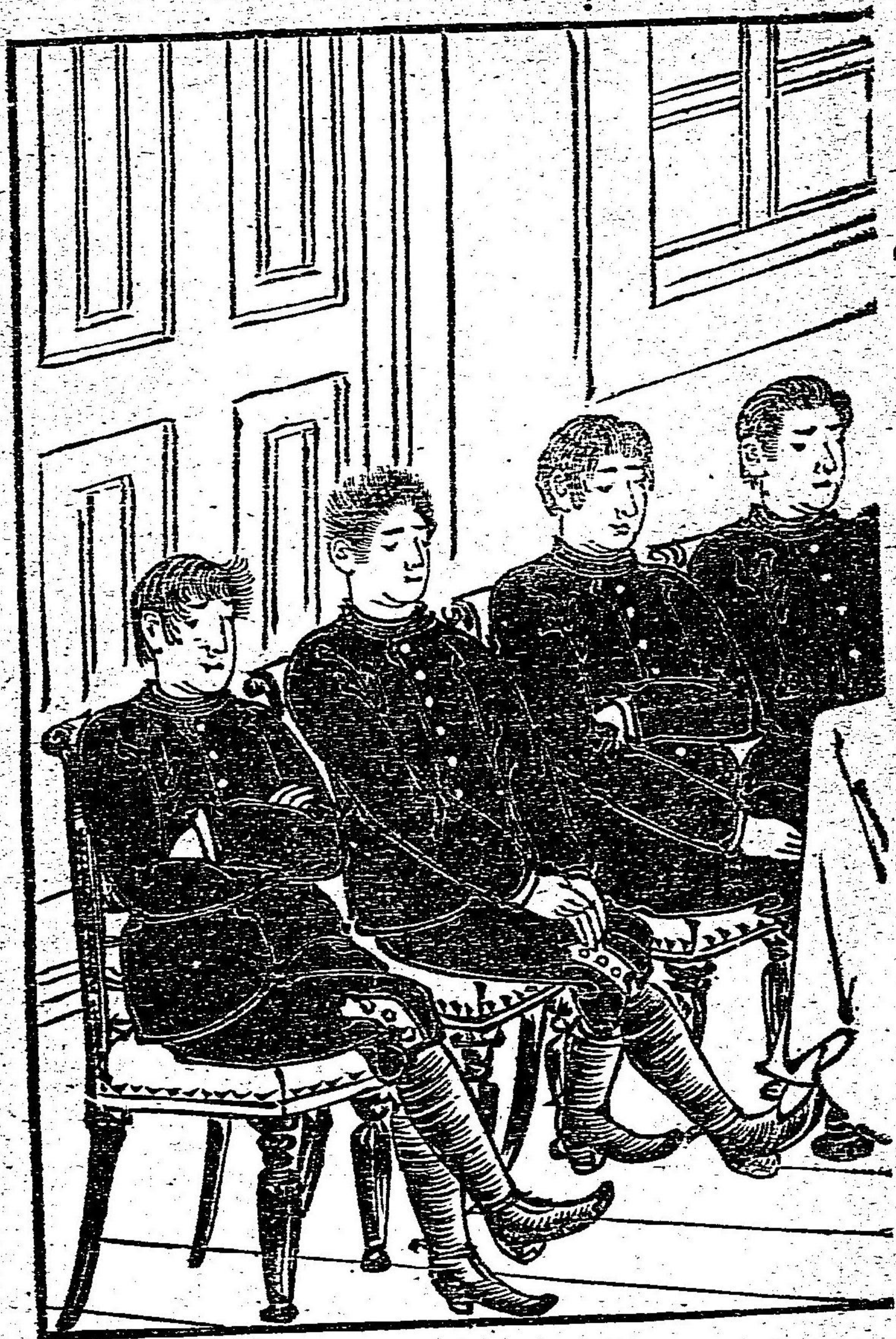
W4552/23  
特64  
823

家庭修身はなし  
教育

お子供衆と申す者の兎角數多くの話しを聞いて物事の道  
理を辨へ置き成長して後ちの世渡の助けといはるれば  
色々の話しがあることで御座りまするが就中身の行ひを  
正す所の修身はなしと云ふもの大切のもので何んよ付  
けても人間の世渡の本で御座りますれば此の修身のあは  
きこと云ふもの澤山聞いて置くのが宜しいことであり  
ますうで私が此の修身はなしとするのであります

明治廿三年四月

著者識す





○子供の常より人真似より學ぶ

子供と申しまする者の何れ限らず常より能く人真似をする  
 もので人が善いことをしますれば直ぐも其の善いことを  
 真似するし又人が悪いことをしますれば直ぐも其の悪  
 いことを真似する故より子供の前での迂かりしたことの  
 いたさんことであります昔は漢土の孟子と云ふ聖人が子  
 供の時其の家が市町よりありし時より商賣の真似をし又  
 寺の近所より居た時より葬式の真似をし又學校の隣りより遷  
 りましたら常より能く學問の真似をしましたさうです實より  
 子供の前での善い事をして見せるのが肝腎のことです



○戯言から駒が出る

假令取り留めのない夢でありましても固と其の人が何か  
 其の事を思つたことがあければ其の夢を見る筈もないこ  
 とで之れと同じく戯言を申しても幾らか腹は無いこと  
 言われんものであります故に戯言だくと申して人の氣  
 よかゝることを無暗矢鱈に言つていならぬことで若し強  
 ひて繰返しつづまらぬ戯言を言ひますれば其の戯言か  
 ら駒が出て終りの喧嘩口論ももなることでありますれば  
 戯言の慎むべきことであります讀者諸君の恕せよして  
 ありませぬや



○藝と遊ぶ

人ど云ふ者の一日何もせず茫然として居られべき筈の  
 ものでね座りません善い事をして居らなければ必ず悪  
 い事をして居るもので何かして居るものでありますれば  
 常々間断なく依頼する所の善い事があければあらぬもの  
 であります之を子供も就いて考へて見まするに朝起て夜  
 寝るまで讀書習字算術は身を委ねて居けば宜しきことで  
 ありまするが眞逆よさうも行かぬことでありますれば何  
 か學問の外は藝に遊ぶの工夫がなければならぬことで修  
 身のお話をして遊ぶなど其一つであります



○正直の長壽の種なり

讀者諸君の長壽を望まるとして、ことでありませう然らば常  
 能く正直にして少しも嘘言を言つてはありませぬぞよ其  
 れの又何故だと申しまするや抑も嘘言を言ふよの彼の事  
 を斯うして此の事を斯うしてと尾頭の合ふやうよ心を勞  
 し氣を遣ひ常は化皮の顯われぬやうよと心配しする程  
 よ生命の大毒となることでありませう然るよ正直の有儘よ  
 言ふもので少しの心配もあらず常は其の心が爽快として居  
 りまするから長壽をするの種となることでありませう實  
 正直の長壽の種で不正直の早死の基であります





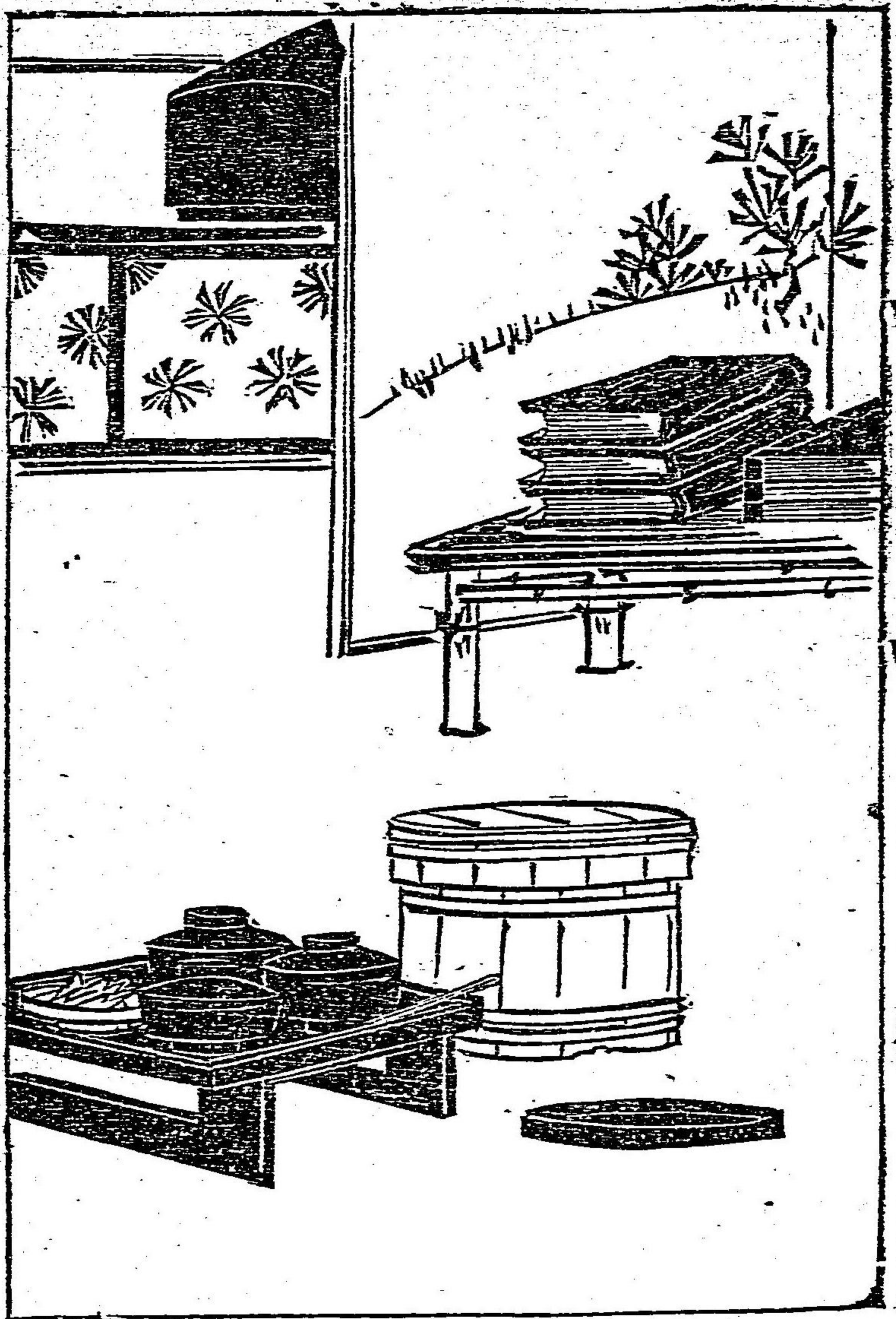
○善悪の行ひの漸を以て成長す

一日善を行ひますれば福が未だ至りませぬとも福が自ら遠ざかります一日悪を行ひますれば禍が未だ至りませぬとも福が自ら遠ざかります善を行ふ人の丁度春の園の草の如く一寸の共の長ずる所を見ませぬとも日々増す所があるもので御座ります之れより引き替へたる悪を行ふ人の譬へば猶ほ刀を磨くの砥石のごとく一寸の共の腐くることを見ませぬとも日々損する所があるもので御座ります其の本の小さくありても段々も大きくあるものされば能く傾まねばなりません



○人學ひとまなばざれば寧やすろ死しす可べし

人たる者の或あるに以もつて食くひぬことがありましても以もつて學まなば  
おければありません若もし三度さんどの食くひを喰くひませんければ如い  
何いかいたませうか只ただ死しぬばかりであります既すでに死しま  
すれば則すなはち事ことの其そのれを以もつて終おそるものですが若もし學まなびませ  
んければ生いきて居ゐりまするが禽とらや獸けものと同じやうになつて  
しまします死しんでも猶なほ人ひとだと云いはるゝのと生いきて居ゐても  
禽獸とらけものだと云いはるゝのと何方どなたが宜よろしう御座ございますか私わたくし  
の考かんがへでの寧やすろ死しぬとも生いきて居ゐて禽獸とらけものと云いはれたくない  
ものだと思おもいます其そのれより學まなばなければありません



○世渡の秘訣

或事<sup>あること</sup>に就<sup>つ</sup>いて之を爲したる方が善きや但し<sup>たゞ</sup>の又爲さぬ方が善きやと心迷<sup>こころまよ</sup>ふて決<sup>か</sup>し難<sup>か</sup>る時の先づ大抵<sup>たいてい</sup>の爲ぬ方が善きものであります借<sup>か</sup>りて又或事<sup>あること</sup>に就<sup>つ</sup>いて言<sup>い</sup>つた方が善きや但し<sup>たゞ</sup>の又言<sup>い</sup>ぬ方が善きやと心惑<sup>こころまよ</sup>ふて定め難<sup>か</sup>る時の先づ以<sup>も</sup>て言<sup>い</sup>はぬ方が善<sup>よ</sup>いことでもあります其れ<sup>の</sup>又何故<sup>な</sup>だと申<sup>ま</sup>しまするよ既<sup>すで</sup>に之を爲し之を言<sup>い</sup>つてしまつた後<sup>の</sup>ちの爲さぬ方が善<sup>よ</sup>かつた言<sup>い</sup>ぬ方が善<sup>よ</sup>かつた思<sup>おも</sup>つても取<sup>か</sup>り返<sup>か</sup>へし<sup>が</sup>付<sup>け</sup>かぬことですが爲<sup>な</sup>さぬと言<sup>い</sup>ぬぬとの後<sup>の</sup>ちよ爲<sup>な</sup>すことも言<sup>い</sup>ふことも出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ますぞの御座<sup>ご</sup>りませんか



○人の善の上よも又善なる可し

至て誠まことの心を以て人を感あはぜしめやうと思おもひましても時と  
 しては猶ほ服うぶせぬ者のあるは人生じんせいの習なひでありまするの  
 よ其の間まは詐偽いつはりを設たけて之を行なふ者が何とて人を服うぶせし  
 むるこゝが出来できませうや其れに到底出来ぬことでありま  
 す去れバ何かの事ことは就ついて假令たとひ其れに善よあるにも致いたせ其  
 の善よの上にも又更さららよ善よは致いたさぬべならぬことでありま  
 す然しからざれば決けつして人を服うぶすることを出来ぬことであり  
 ます故ゆに此の事ことの善よなれば此の上よ善よの要えせぬと云ふこ  
 とは言いひぬれぬことであります



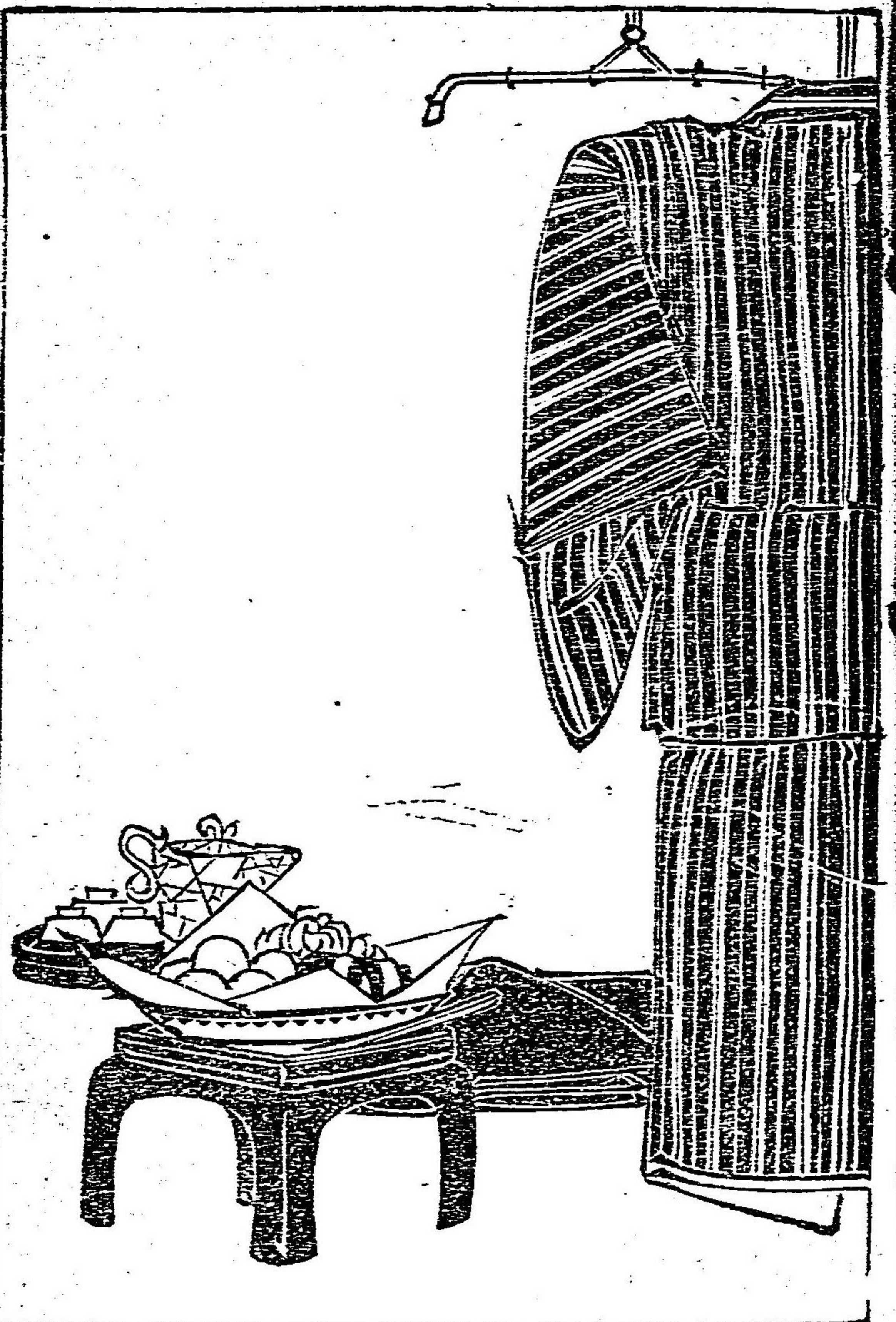
○瓜瓠の蔓を観て感あり

讀君諸君の瓜瓠の類を見たことには座りませんか抑も此  
 の瓜瓠の類の竹や木を以て之を引きますれば昔な之れよ  
 纏ひ附いて上ることは丁度てもあく心ありて上るが如き  
 ものであります右へ招かれ右へ來り左へ導かれ左へ來り  
 ます去ればお子供衆さとりお父さんやお母さん又の學校  
 の先生が善い方へ誘ひましたら其の善い方へ向て行か  
 ければあらぬことであります若し其の誘ふ方へ行かぬ  
 人として瓜瓠の類も劣ることですナント耻かしらこと  
 ありませんか



○格言の實行して始めて其功あり

修身や教育の格言の色々と澤山あることで修座りまする  
 が只だ之を聞いたばかりで身よ之を行ひませんければ何  
 よもならんことで座ります之を譬へて申しますれば美  
 しい着物や甘い食物を澤山持つて居りましても只だ之を  
 持つて居たばかりで何よもあらぬことを親しく身よ之  
 を着たり食したりして始めて其の効能のあるものであり  
 ます格言も亦之れと同じく身に之を行ふて始めて其の効  
 あるものでは座ります決して聞いたばかりで其の功の  
 ありません



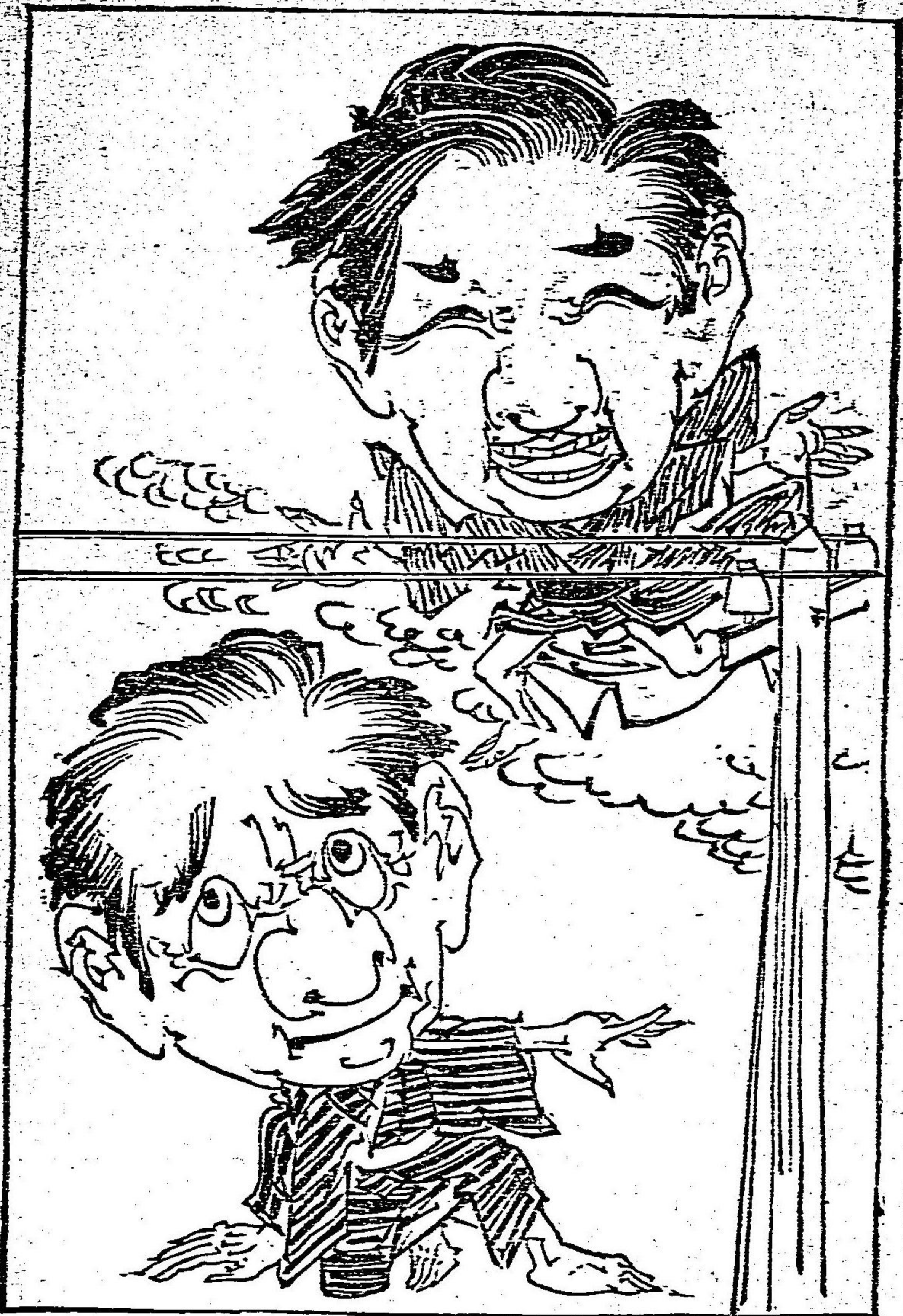
○人の目も向て語る可し

人よ語るよの二ツの道がありまます其の一ツの耳も向ッて  
 語るのぞ其の一ツの目も向ッて語るのぞありまます其の  
 の聞く人をして感動せしめやうと思ふよの必ず其の目も  
 向ッて語らなければならぬことでありまます其れれ亦何故  
 だとやすよ我れ能く云々の事を爲すと云ひましても只だ  
 口ばかりで人の決して信じさせん其れよりの口の黙し  
 て居りましても實地よ其の事を爲して其の人の目も見え  
 ますれば急度之を信じて成程と感心することでありまます  
 何事も目も向ッて語るのぞ肝腎のことでありまます



○善惡の間よの電信あり

善と惡との相違の固と雲と土との相違の如く大層は離れて居るもので御座りまして決して日を同うして語るべきものでありません是れの讀者諸君の能くは承知のことでありませう去りながら此の善と惡の間よの電信がかかりてありまする程は兒の善道に赴いたからよいと安心しける電信の忽ち通ふて惡道に赴くの瞬間であります實は恐るべきものであります故に常は能く心の手綱を堅くめて置のが肝腎のことでもあります





○智者又交ひるの徳

智ある人に常々交ひりますれば自らも亦其の徳を蒙るこ  
 とゆるる人も決して慢る等のことひありませんが若しも悪  
 き友達と交ひりますれば人が怖れをあして思ひことであ  
 ります譬へば虎の先へ立て行く狐を總ての獸が怖るゝが  
 如きもので固と狐の何も怖るじきことひありませんねと後  
 から虎が来るから怖るしいのであります去れば善い友達  
 と交ひると悪き友達と交ひるとい大層な相違のもので忽  
 せよひならぬことであります讀者諸君の何うぞ智ある善  
 い友達と交ひつて下されませ



○人の悪口を耳に入ること勿れ

悪人より善人を悪口する時善人も堪へずして亦悪口し返へしますれ此の人の彼の悪人と差したる變りのあい人で矢張同じやうある仲間の人と云いねばおらぬものであります去る人が何と悪口しても構はず堪へ忍ぶを智者とい申すもので此方で一向に構いねば彼の悪人の便を失ふものであります譬へば野原で火を擧げて空を焚くが如く答へがなく張合があれば自然と息んでしまふものであります故に人の悪口の耳に入れぬが宜しいことであります



○喜ぶよ足らず又怒るよ足らず

我れ貴うして人の之を奉ずるの此の帽子の高くして髯  
 の長いのを奉ずるのであります又我れ賤うして人の之を  
 侮るの此の帽子の低くして髯の短いのを侮るのであり  
 ます總て人の着物が善ければ之を奉じ着物が悪ければ之  
 を侮ることで御座りますれば是れ何と我れを奉ずるの  
 でおなく又我れを侮るのでもおいことでありますれば敢  
 て喜ぶよも足らんことで又怒るよも足らんことでありま  
 す實は奉ぜられたの着物で侮られたのも亦着物あるの  
 可笑話話しであります



○酒客の財布の徳利の如し

酒客の財布の幾ら何程澤山の金銭がは入って居りましても酒の香を嗅ぎつけますれば忽ち其の財布から金を取り出して酒を買って飲んでしまふことでありませぬ其の財布の丁度一種の徳利のやうなるものであります何故なれば多くの金銭がありましても直に酒になつてしまひますからであります實に馬鹿らしい話しであります何うぞ讀者諸君のお子供衆に此の後ちとても成長の上財布の財布よして置いて徳利よいたさぬやう願ひます酒の氣狂水と申して甚だ悪いものであります



○家政の道

富貴なる人の小分よくらすのあやふきこといふいもので  
 ある譬へハ根の太き木の枝葉少なきの大風よも吹き倒さ  
 れぬが如きものであります然るよ小分の人の大きよくら  
 すのあやうきこといふものである譬へハ根の浅く入り  
 たる木の枝葉茂りたるの少しの風よも動もすれば吹き倒  
 ざる、が如きものであります故よ家の生計と云ふもの  
 相成るべくハ小ざくくらすのが宜しいことを西洋の勝  
 手を大きくすれば家産を小さくすると云ふ諺もあります  
 宜しく察すへまことであります



○丸い世界よ棲む人の丸い心

讀者諸君の既に知られまするが如く此の世界の丸いもの  
 で丁度球のやうなる状ちであります其れ故に地球と申し  
 ます又此の世界を照す所の太陽も丸いものでありますれ  
 ば又夜を照す所の月も固と丸いものであります又人間の  
 頭も丸いものであります此の如く丸い盡しの世も生れ出  
 でたる人の心の亦丸くみければならぬものであります然  
 るを此の丸い世界よ棲む人が時として四角な心を持  
 つことのあるの何うも釣合のつかぬ話であります  
 故に讀者諸君の丸い心を持つて下さり



○人と虎の話し

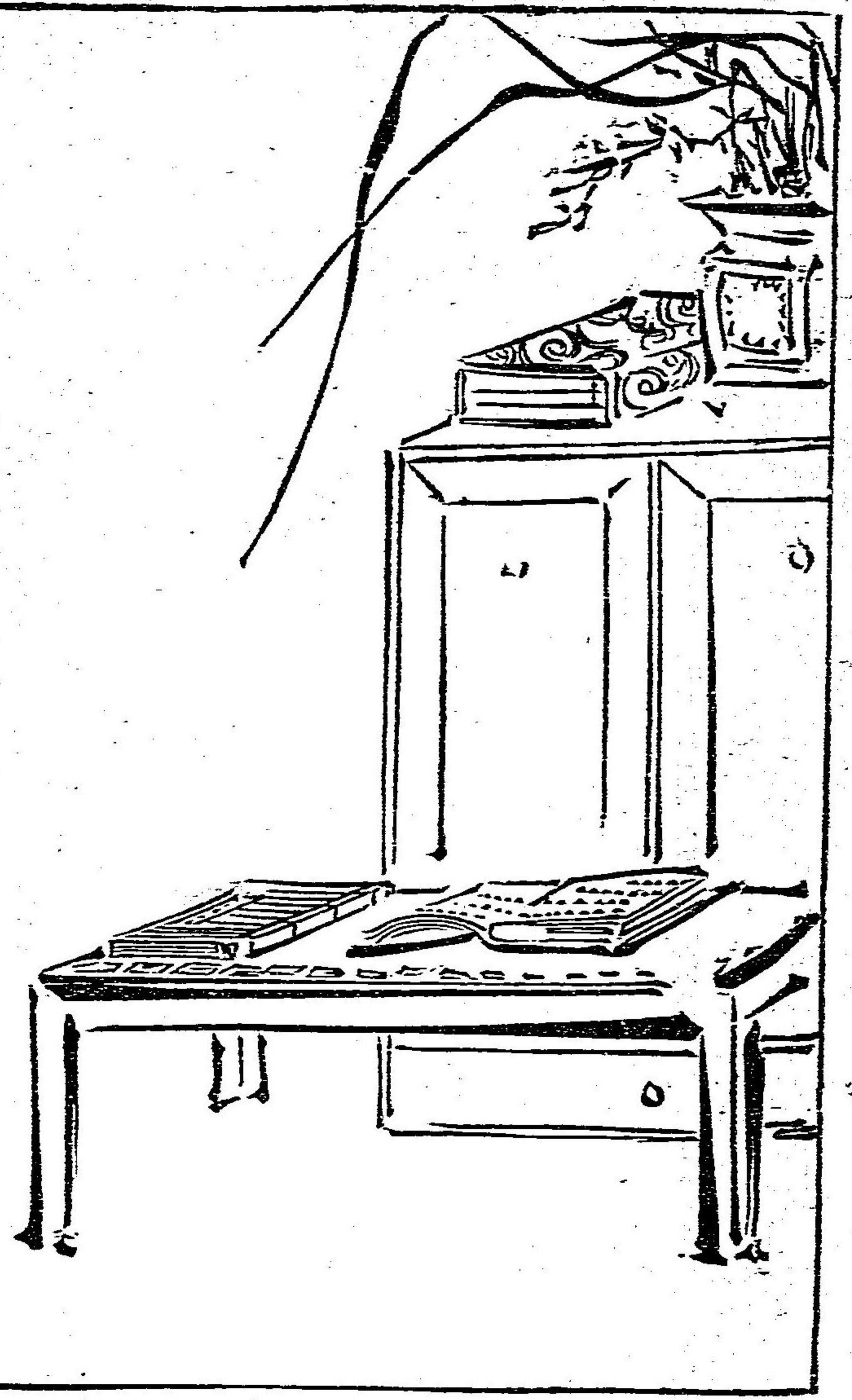
人と虎と比べまするは虎の力人の力は數十百倍にまじ  
 て又怖ろしい爪や牙がありまするは人よ此等の利器が  
 ありません然るは人の虎の肉を食するの常のことで虎  
 が人を取て喰ふといふことの容易よないことでありま  
 す又虎の皮の人常は布物よしまするが虎が人の皮を用  
 ぬたと云ふ話し聞かぬことであります是れ抑も何等  
 の所以でありませうか虎の力を用ぬ人の智を用ふるの相  
 違から此の區別が出来たことであります故は人の能く學  
 問して智恵をつけなければなりませんことでもあります



○藏書よ由て其人を知る可し

人間の友達ばかりが友達でいなく書物も亦一種の友達であります而て又人と云ふ者の直ちよ其の人の如何やうある者だと云ふことが知れぬとも其の人の常よ交じりる所の友達を見れば直ち其の人が知れることでもあります故よ此の一種の友達とも申すべき書物も亦其の貯へ藏して置く所の本を見ますれば直様其の人の何のやうある人だと云ふことが知れます即ち善い書物を持つて居る人の善い人で悪い書物を持つて居る人の悪い人であります故よ

讀者諸君の善い書物を藏しあさい





○柔能く剛を制す

正直正路よして陰徳を積む者の當分の弱く見え一旦の悪  
 人よ掠めらるゝことがありても諸天の憐れみある故に遂  
 よの勝ちとなるものであります悪人の威勢強く邪を以て  
 正を破る一旦の榮えましても直に亡ぶるものであります  
 譬へば齒の剛さものでありますも欠け落つることがあ  
 りて年寄るまでの遣われぬものであります然るも舌の柔  
 らがよて折々齒は噛はれて痛むことがありましても一生  
 身は附いて離れぬものであります之を見ても強いとて邪  
 多ことしの出来ぬものであります



明治二十二年六月貳拾三日印刷

明治二十二年六月貳拾五日出版

定價五錢

版權所有

著者兼

發行者

東京府平民

西村富次郎

京橋區大鋸町四番地

東京府平民

印刷者

瀧川三代太郎

日本橋區新和泉町一番地

東京市京橋區大鋸町四番地

發賣所

自由閣書店

